
そしてそれは青春で3

黒崎ろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そしてそれは青春で3

【Nコード】

N8077X

【作者名】

黒崎ろろ

【あらすじ】

朝倉政長は24歳で絵を描くのが好きな若者で、自分の生きてきた人生と今の自分のあり方とこれからの自分について悩んでいる若者らしい若者。そんな彼がある出会いをきっかけに変わるかもしれないし変わらないかもしれない。そんな物語。

【1】お見舞い（前書き）

第3部です。そんな感じですよ。

まあとりあえず読んで下さい。

【1】お見舞い

とある総合病院。

僕はとある友人の見舞いに訪れていた。

高校時代の同級生で、最近はあまり連絡は取っていないが、それでもたまに仲間内で会っては互いの近況を酒を交えて報告しあう。そんな感じの気の置けない友人の一人。

久しぶりに連絡が取れたと思ったら、『交通事故に遭った』ときた時にはさすがに驚いた。

だがまあ本人は至って元気で、痛々しいのは見た目だけらしいが……。

僕は事前に聞いていた番号の病室へ向かう。

「えーと……。あ、ここだ」

僕は部屋の番号とプレートに書かれた名前を確認する。

『高柳浩輔』

うん、間違いなくここだ。

「失礼します」

カラカラと入り口の大き目のスライドドアを引き、中に入る。

「えーっと……」

僕は見知った友人の姿を探す。

奥の方かな、と思ってカーテンをひよいと越えたその先には……。

「……」

いた。高柳浩輔は確かにそのベッドにいた。右手右足に大げさな程のギブスをはめて。

それにももちろん驚いた。しかしそれ以上に驚いたのが……。

ベッドの脇の椅子に座ったとても綺麗な女性が、細かく切ったりんごを浩輔にあーん、とその口元に運んでいるまさにその最中であつたということ。

これを見た瞬間、僕の中の『リード オブ エア』の機能が発動。

とっさに判断を下す。

「間違えました。なんとというか精神的に」

ぺこり。そして回れ右。総員退却だ。

「いやいやいや、間違えてないから！そもそも精神的にって意味が分からないから！」

……

……

……

「こちらが、その、俺の彼女で『二条深雪』さん。で、こっちが俺の高校の時一緒だった『あさくらまなな朝倉政長』」

浩輔からそう紹介があり、その二条さんがぺこりと頭を下げる。

「二条です。この度はわざわざお見舞いに来ていただきありがとうございます。ついでに」

「あ、いえ。めったに病気もなにもしない奴がいきなりトラックにはねられたと聞いて様子だけでもと思ひまして」

つられてこちらも腰を低く返す。

とうか浩輔の奴、いつの間にこんな綺麗な彼女さんを……。高校の時は女っ気が微塵も無かったのに……。

「なんか深雪が俺の母親みたいな挨拶してる」

そして本人こんな感じだし。

「なんかというか元気そうで安心したよ。退院までは時間かかりそうだけどね」

僕はギブスをちらり。

「うむ。まあ天が俺に休めと言ってるんだと解釈して、休む事にするよ」

浩輔はのほほんとした様子。下手に深刻そうな感じにされるよりはいいに決まっってはいるが。

「バイトは大丈夫なの？かなりの期間休む事になるでしょうに」

「うむ。それが現在の最大の問題点だ。退院まで仕事休むのは正直やばい」

言うほどやばい感じには聞こえないトーンで浩輔は言う。

「やばいからこそ……これを逆にいい機会と捉えて、俺は今後の自分の身の振り方とか考えようと思ってる」

「なにか考えがあるの？」

「今はない。だけど何か考えるさ。なにか、な」

浩輔は先行きが不安というよりはむしろ楽しんでいるような口調で言う。

「お前こそどうなんだよ？まだ絵は描いてるのか？」

浩輔からのごく簡単な問い。

「あー……。描いているよ、もう趣味みたいなものだけだね」

単なる近況確認みたいなものなのに、僕は少しだけ心に詰まるものを感じる。

「そうなのか。じゃあ実家のパン屋継ぐのか？」

「かもね。今じゃすっかりパン作りの方が手に染み付いてきちゃったよ」

僕の実家はパン屋。今はその手伝いをしながら細々と絵を描いている。

美大卒の名が泣くね、これは。

「そうか」

浩輔はあえてかは分からないがそれだけしか言わなかった。

「うん。さて、こつやって話も出来た事だし僕はそろそろ帰るよ」

僕は椅子から立ち上がる。

「あれ？もう帰るの？」

「うん。あんまり長いして馬に蹴られたくはないから」

僕はちらりと二条さんを見る。

「お前……。古い言い回しするな」

「……もっと返し方あったよね」

いつもの。なんかいつもの僕と浩輔な感じでその場のやり取りに幕を下ろし、僕は本当にその場を退散する。

清潔感のある白い廊下。その廊下を出入口へ向かい歩く。

「美大卒の名が泣く……か」

ふとそんなことを口走る。あまり考えないようにしていた事を。

「ふう……」

僕は真つ直ぐ病院を出て帰る気にはならず、1階の自動販売機で缶コーヒーを買つと、どこかゆっくり飲めるような場所を探す。

「……ん？」

病院の中庭に程近い場所を歩いていた時、ふと僕の耳にそれは聞こえてきた。

「……」

僕はかすかに聞こえるその音が気になり、導かれるようにその音の源へ向かって歩き出していた。

辿り着いたのは病院内の催し物などが行われるレクリエーションホールであった。

わずかに開いたその扉の先を覗くと、ホールの奥に、立派なグランドピアノが置かれており、音はそこからであった。

美しく繊細でどこか儂げなその音色が奏でられるその様子に、僕は言葉を失った。

うまく言葉には出来ないが、なんとというかすぐ心にくるものがあったからだ。

そうしてを聴いていると、やがて静かに演奏が終わる。

「ふう……」

ピアノを奏でていたその少女は、そこで初めて一人の観衆がいることに気付く。

向けられる驚きの眼差し。

これが僕と彼女とのファーストコンタクトであった。

【1】お見舞い（後書き）

祝・高柳浩輔生存！

……そんなに祝う必要なかったかな？

では次回。

【2】そしてそれは青春で1・5的な（前書き）

あいつとあの子の話的な。

1作目からのジャンプをおススメします。

では、ごうげ。

【2】そしてそれは青春で1・5的な

「……変わってないなあ」

浩輔はしみじみと呟く。

「すごい優しそうな人だね」

深雪は浩輔の寝るベッドに寄り添う様な位置に座りながら言う。

「いや、実際あいつはかなり優しい奴だよ。お人好しとも言つが」

「悪い人よりは何倍もそつちのほうがいいよ。こうして学校卒業してから何年も経った友達のお見舞いなんてそうそう来れないよ」

深雪の言葉に、浩輔は確かにと頷く。

浩輔の友人達は、専門学校時代の連中ならともかく、高校時代まで遡ると、こうして直接見舞いに来てくれるのはほんの一握りもいない。

というか現状、政長しかいなかった。

「か、もしくは俺の友達が少ないか」

「ネガティブなこと言わないの。皆24ともなれば働いていてもまるでおかしくはない年齢だもの。そうそう時間は作れないと思う」

時間。その言葉が浩輔の中に響いた時、深雪が意図したものはま

るで違う意味が生まれていた。

「……俺達も、もうそうそうこうして二人で過ごせないんだよな」

浩輔はこの台詞を呟くのを少しだけ躊躇した。言えば絶対に二人の間に重い空気が流れるのは知っていたから。

「うん……」

深雪はそれ以上言葉を繋がなかった。しかし浩輔にはその表情が寂しげな色に染まるのを見逃しはしなかった。

「3日後だっけ？こっち発つの」

「うん……。もう少し引き伸ばせればよかったんだけど」

深雪はため息混じりに言う。

「アパートの契約とか色々あってね。こっちにこれ以上滞在するのが難しくなっちゃって」

「仕方ないさ。元々そのつもりだったんだし」

浩輔は穏やかな笑みを浮かべる。

「でも絶対にまた来るからね。連絡もたくさんするから……」

深雪は浩輔のベッドの左側。浩輔が怪我をしていない側へ回り込み、自分の手で浩輔の左手をそっと包み込む。

「……………幸せだねえ」

浩輔は今度こそしみじみと呟く。

「え……………」

少し場に不似合いとも言える浩輔の台詞に、深雪は小さく疑問符を頭上に浮かべる。

「こうやって離れ離れになるのを惜しんでくれる恋人がいるなんてさ……………。こういう言い方が正しいかは分からないけど、さ。好きになつて、諦めないでよかつたつて」

浩輔は深雪の目を見てにこり。

そんな浩輔を見て深雪は少し手に力を込める。

「ん？どうしたみゆ」

その力加減に浩輔が反応した直後、言葉を紡ぎきるその前に、

深雪の唇によりその先の言葉は奪われてしまった。

「……………」

浩輔、呆然。突然の事に体も頭もついていけない様子。

「嬉しい事言ってくれたから……………不意打ち」

果たしてその単語で括るのが正しいのかは分からないが、深雪はそ

う言つて顔を真っ赤に染める。

「なんてこつたい……。よし、俺決めた」

浩輔は呆然の境地から脱したかと思いきや、いきなり力強く頷く。

「何を決めたの……？」

「俺絶対に深雪のこと幸せにする」

「ええ……！」

いきなりの宣言に深雪は赤い顔が更に赤くなる。

「怪我治して仕事見つけて稼げるようになって……。そうしたら深雪の事満を持して迎えに行く。約束する」

浩輔とて顔は赤い。しかし浩輔は止まらない。

「まだ付き合い始めたばかりだけでも、俺は深雪との出会いが今に至るまで、そしてこれからを大事にしていきたいんだ。だから……もし、深雪が待ってくれるっていうんなら、俺は全力で君を目指して努力する」

「……まいったね」

深雪は笑顔を浮かべる。恥ずかしそうな、しかし嬉しそうな笑みを。

「今日は嬉しい事ばかり言われる日だ……」

そう言つて笑顔の端に光る物を浮かべる深雪を、浩輔は黙つて抱きしめたのだつた。

「……………今行つたら馬に蹴られて死ぬに一票」

「いや、そこをあえて突撃しちゃう男気を發揮してくれちゃうに一票！頑張れシュー君！」

「頑張つてたまるか！俺は空気は読める男なんだよ」

浩輔と深雪が甘い空間を作り出す病室の外には、柏木鷲と、黒髪の小柄な女の子がいた。

「いいんだよ！シュー君なら出来る！ヒアウイゴー！」

「英語はせめてもつとらしく言えよ。ていうか行かないからな。ほら、帰るぞ」

鷲は黒髪の女の子を置いてずんずん通路を進む。

「えー……！シユー君の意気地なし。あ、そうだ私ちょっと行きたい場所が……ってシユー君聞いて！」

黒髪の女の子も後に続く。

それは、うつすらとピアノの音が聞こえた時間の出来事であった。

【2】そしてそれは青春で1・5的な（後書き）

柏木が変な女連れとる。

果たして誰なのか……。

……本当に、だれなのか。

……では次回。

【3】フレンドスタート（前書き）

寒くなってきましたねー。

しかしまだコタツをだすには至らない。

まだ、まだだ！

ではそつぞ。

【3】フレンドスタート

僕はその時少しの間止まってしまった。

ピアノを弾くその子の姿を見て、自分の中の、大切な、しかし奥底に眠らせていた何かを見つけた気がした。

「あ、あの……」

自分を見て硬直する男の姿、即ち僕の姿を見て不審に不安がるその子。

「え……。あ、ごめん」

ようやく自分の怪しさに気付き顔ごとその子から逸らす。

「い、いえ……。あの、私に何か？」

小柄な体を少し縮こまらせて、その女の子は僕の様子を窺いながら聞いてくる。

「いや、なんだか綺麗なピアノの音が聞こえてきたからさ、ふらつと来てみたんだ」

人間、こういう時はよく口が滑るものである。良くも悪くも。

「え……。綺麗なって……」

女の子はよほど僕の台詞が意外だったのか目を泳がせる。

「あはは……。にしてもこんな所にこんな立派なピアノがあるなんて知らなかったな」

僕はピアノに関しては素人だが、それでもこのグランドピアノが値打ち物であることはなんとなく分かった。

「ここはレクリエーションホールですから。たまにミニコンサートをやってたりするんですよ」

「へえ……」

周りを見渡すと、隅の方にパイプ椅子やテーブルがギュツと詰められて置かれているのを発見。なるほど、あれをここに並べるわけだな。

「で、君は演奏する側の人？」

「とんでもない。私は聴かせていただく側の人間です。まだ私の演奏なんて人に聴かせられたものじゃ……」

女の子はそう言ってまた縮こまる。このままちっちゃくなっていったら面白いな、とか訳の分からない事を一瞬考える。

「でもさっきのピアノ、少なくとも僕は好きだな。なんかこう、心に訴えてくるものがあった」

だからこそ半ば無意識の内にこんなに接近してた訳だしね。

「あ、ありがとうございます……」

女の子は褒めて頬を少し赤く染めて長めの髪をツインテールに結んだその片方をいじいじ。

その様子がなんか可愛らしくて、だから俺は、

「僕は朝倉政長っていうんだけど。君は？」

彼女の事を知りたくなってしまった。

しかしもつと他にあつただらうと言いたくなる質問だ我ながら。唐突でしかも雑だ。

とも僕は思ったが、当の彼女はそんな風に感じた様子は無く、

「あ、私は峰岸藍みねぎしあいっていいいます。よろしくお願いします」

峰岸さんはそう言ってぺこり。うむ、いい子だ。

そんないい子な峰岸さんと、僕は少し話をした。

曰く、藍ちゃん（話している間に仲良くなりました）は大学1年生の18歳、体が弱く、月に何度も病院に来なければならぬんだという。しかしここに来ればこの立派なピアノを弾くことが出来る為今はそれほど苦では無いのだという。

「朝倉さんはお友達のお見舞いですか」

「うん、子供助けて自分が轢かれてしまったドラマの主人公みたいな奴がいてね」

「へー、実際そういう人っているんですね」

藍ちゃんはすごいなあと言いながら何度も頷く。

「で、病室に行ったら綺麗な彼女といちゃついでいてね。少しだけ心配して損した気分になったよ」

「良かったですね。その人助かって」

「まあね、だからこうして話せるわけだしね」

僕は、そう言っただけ先程訪れた病室の様子を思い出す。

……。ちよつとだけ彼女が欲しくなったな。

「朝倉さんは彼女さんはいないんですか？」

藍ちゃんの小動物のような可愛らしい様子から剛速球が飛んできた。

「いないんだよね。これが」

なにが『これ』なのかはいまいち分からないが、僕はそう言っただけをすくめる。

「そうなんですかー」

藍ちゃんはそれだけ言ってまた頷く。何を納得したのだろうか。

「今は家の手伝いして絵を描いての生活がそれなりに楽しいからね。」

そうすぐには彼女はできないかもね」

「そんなのもつたいたないですよ！もっと青春しないと！」

藍ちゃんは両方の拳をぐつと握って僕への励まし。

「ははは。そうだね」

なんだかこの子はいちいちやるのが可愛らしいな。

「じゃあさ、藍ちゃんが僕の彼女になってよ」

……俺は確かに目の前のこの女の子に気を許した。許した瞬間に足を滑らせた。今はそんな感じ。

「わお。会ったばかりの女の子を口説こうとは朝倉さん顔に似合わずワールドですね」

藍ちゃんはむむむっと、眉間にしわを寄せる。

「ごめん、ちょっと調子にのっ」

調子に乗っちゃったただだから軽く聞き流して。そう言っつもりだったが、この先の言葉は見事に遮られる。

「じゃあ、お友達から始めましょうー！」

という彼女の提案に。

「おっ……おおお」

何かが、何かが始まった予感。

それが何か、今は分からないけども。

こうして僕に良きお友達が出来ました。でいいのかな？

【3】フレンドスタート（後書き）

しかしみかんはすでに食べました。去年の冬のリベンジでした。

甘酸っぱかったです。

青春と一緒に。

では次回。

【4】モンキーマジック(前書き)

そろそろもじゆつに、と〜ブる〜かな〜

無理！

……じはぢんじん。

【4】モンキーミュージック

僕に新しく可愛らしい友人が出来てから数瞬後のことだった。

「ああ~~~~いい~~~~!!」

すごく良く伸びる声が近づいてくる。

そしてどたどたとけたたましい足音。

「藍!会いに来たよ!なんちゃって!」

来るなり一発ぶちかましてくれたくれました。

黒髪の女の子がよきつと姿を現したかと思いきやその子は藍ちゃんに飛び掛かる。

「んふ〜。私がいなくて寂しくなかったかい?」

そしてすりすりと藍ちゃんに頬を寄せる。

「あはは。昨日も会ったばかりじゃない。莱那」

藍ちゃんはくすぐったそうにみをよじる。だが表情は笑顔一色。

「私は毎日藍ラブ成分を摂取しないと死んでしまう体質なのだよ」

莱那というその女の子は鼻をふんふん鳴らしながら尚もすりすり。

「世界一厄介な体質だなおい」

今度は金髪の男の人が入ってくる。

「だけどそのお陰で私は藍とラブラブできるのでだから体質様様だよ
シユー君」

「……シユー君？あの、莱那。こちらの方は？」

「ん？私の旦那」

ゴチンツ。

「わお」

思わず歓声があがる見事なチョップ。金髪の彼から黒髪の彼女へそれは放たれた。

「誰が旦那か。俺はこいつの……。峰岸藍さん、だったね。猿回し
って知ってるかい？」

「え？知ってますけど……」

「なら話は早い。こいつは猿。俺は回す。そんな関係」

「おいこら」

黒髪の莱那ちゃんが抗議の声。うん、抗議したくなる気持ちは分かる。

「そんなこと言つて。本当は私にべた惚れなく・せ・に」

体をくねくね。人差し指をもじもじ。菜那ちゃんが分かりやすくアピール。

「俺は柏木鷺。この病院に友人が入院しててね。その見舞いで来たんだ」

「……今のは効いたよシユー君」

金髪の柏木さんのガン無視に菜那ちゃん哀し、そうに見える表情。

「そして峰岸さん。そこの彼は？」

こうして僕の方に視線が向けられる。

「ど、どうも……。朝倉政長です」

「私の新しいお友達です」

僕が控えめに挨拶すると、藍ちゃんが元気に付け足してくれる。なんかこちょばゆい。

「珍しいね。年上のしかも男の人って」

菜那ちゃんがふむふむと何を考えながらなのは分からないが腕を組んで頷きながら僕を見る。

「うん。お友達からスタートだよ」

藍ちゃんはそう言うてにこっと笑顔。

「うん？……スタート？」

菜那ちゃん当然というべきかその単語に引っ掛かる。

「なるほど目指せ恋人という訳だな」

柏木さんがするつとんでもない事を言う。

「うーん……どうなんだろうね？」

しかし藍ちゃんは思いのほか動じてない。僕の方が動揺してしまっ
そうだ。

「げはあああああ！！」

と思ったら僕以上に動揺してるのがいた。

「あ、藍……。いつの間にそんな人捕まえたのよ……。お母さんは
嬉しいやら寂しいやら」

菜那ちゃんの一人コントは続く。

「こうなったら私達もいちゃつきましょう！シユー君」

「その必要性を説いたレポート50枚分提出したら考えてやる」

「無駄にハードル高いよ！でも提出したらいちゃついてくれるのね
！あの時みたいに」

そんな時が本当にあつたのか見てる限り妖しい二人だが、

「あー……。あの時はだな」

柏木さんが言葉に詰まっている。あつたんだ。そんな時が。

完全に傍観者と化している僕。

「よし！こうしちゃいられない！さっそく文房具屋行ってレポ！
ト用紙買って来るわ！」

だだつと部屋を出て行く菜那ちゃん。しかしひょこつと顔を出すと、

「じゃあね、藍！」

そう言ってひとしきり手を振って出て行く。

「……じゃあ俺も行くかな。本気で50枚書く気だつたら止めなき
やいけないし」

そう言って柏木さんも「お大事に」と言って部屋を出て行く。

「……なんというか、賑やかな人たちだったね」

僕は言いながら苦笑い。

「菜那はいい子だよ。まさかあんなかつこいい彼氏さん連れてくる
とは思わなかったけど」

「なんかすごい関係性だったけどね」

猿回しというのも妙に違和感がないような……。

「目指せ恋人、なんて言われちゃったし」

「……。恥ずかしい限りだよ」

「あはは……。右に同じく」

こうして、僕達の間には微妙な空気が流れるのであった。

【4】モンキーマジック（後書き）

せうかいりょこうに、いゝきたるいな

お金を貯めなさい。

……では次回。

【5】ある雨が降る日への回想（前書き）

冬の雨は堪えます。

いつその事雪降れよ、とか思います。

でも雪降って電車止まったりしたらいやだな。

……。

晴れる！ 結論

【5】ある雨が降る日への回想

あの二人が嵐の様に作り出した空気から逃げ出すように、僕は病院を後にした。

もう少し藍ちゃんと一緒にいたかったという気持ちもあるが、それ以上にあの場の空気はきついものがあった。

「ふう……」

僕はため息をつきつつ振り返り、病院を見る。

にしても、連絡先くらいは交換しても良かったかもな。

……とか考えたりして。

そんな事を考えていた時だからこそ、突然自分の携帯がマナーモード故の震えを発した時には本気で声出して驚きそうになった。

「……出してないからね」

誰へ言いたいのかは分からないがそんな事を呟きつつ僕は携帯を見る。

メールだ。送り主は母親。

一体何の用だっというんだ？家に帰れば直接顔を合わせるのに。

僕は母の行動に疑問を感じつつメールを開く。

「……あ」

なんの意味の『あ』なのかは今を以つても分からない。

母からは、

『来週はあの子の命日だからね。予定は空けておくのよ。忘れない内にメールで知らせとくね』

といった内容が記されていた。

そっか。もうそんな時期か。

僕の心の中に、誰にも聞こえぬ雨音が響く。

4年前の事だった。当時将来を嘱望されたピアニストを目指す一人の少女が死んだのは。

名前は朝倉凜^{あさくら りん}。僕の妹である。

凜は幼い頃から音楽に対し尋常でない才能を発揮し、特にピアノの演奏に限ってはその道の人間から「文句なしの天才」と言われていた。

コンクールにできれば必ず何かしらの賞に輝き、いずれ世界へという話もあったという。

自慢の妹だった。兄が絵描きとしてくすぶっている分の鬱憤を晴らすかのような活躍を見せてくれる……はずだった。

ある年のコンクールの日。僕は大学の仲間と自主的に開く事になった絵画の個展の準備に追われ、会場へ行く事が出来なかった。

いつも家族揃って凧の晴れ姿を見るのが身に染み付いていたから僕は準備をしつつ若干の罪悪感にさいなまれていた。

しかし、コンクールの終了と共に送られてきた『金賞!!』というタイトルのメールを見て、思わず顔がほころぶ。

メールには画像が添付されていて、立派な装飾の施された楯を持って笑顔でピースする凧の姿が写っていた。

僕は周りが『朝倉がなにやらキモいぞ』と言うのも構わず、にやにやしたまま上機嫌で作業を続行した。

今でも思い出せるな、あの日の雨音は。妙に耳にこびりつくような嫌な音だった。

作業に没頭する僕の携帯に、今度は母親から電話が掛かってくる。

『あの子、もう着いた?』

僕はその内容をすぐに理解することが出来なかった。

『凧がね。あんたに見せるんだって言って一人でそっちまで行ったのよ』

可愛らしい奴だな。この時点では平和にもそんなことを思っていた。いや、実際この時はまだ平和だった。

だが、いつまで経っても凜は現れず、連絡を取ろうにも携帯は繋がらず。

僕は心配になって大学の出入り管理の人に聞いたりもしたが、そういう女の子は通した覚えがないのだという。

僕は一旦準備を抜けさせてもらい、凜を探す事にした。

コンクールの会場からうちの大学までは徒歩20分程度。大きな通りを何度か渡ればすぐに着くし迷うなんて事はまず考えられない。凜は一度来た事あるしな。

道のりも半分を過ぎようという頃、雨足も大分強くなってきて、傘を差していても靴とズボンの裾が濡れてしまっていたが、僕はそんなことは気にせず歩を進めた。

「全く……」

こりゃ金賞を褒める前に説教だな。なんて苦笑いしつつ考える。

凜はコンクールで賞を貰った時、なによりまず家族に報告してくれた。それはどんな賞でも同じだった。そして今回も同じなのである。それを思えば……説教は出来ないなこりゃ。僕は再び苦笑い。

「ん？」

進行方向の交差点になにやらひとだけだかりが。

まいったな。こりゃ通りづらいつたらありゃしない。

交通事故でもあったのかな？まあ確かにここは曲がってくる車の視界が悪かったりするからな。

「あふ？」

ここで僕の携帯が震える。電話、母親からだ。

「もしもし？」

『政長？今何処にいるの？』

後になって思えばこの時の母の様子はおかしかった。

「え？えーと……。あ！もしかして凜の奴見つかったの？」

言いながら僕はなんとか人だかりを抜けようとする。

『政長……。落ち着いて聞いてね……。』

「ん？何、どうしたの急に？」

人の山を抜けた先の道路に、生々しく血の跡が見える。

「うわ……。あ、ごめん、今3丁目の交差点でさ。なんか事故があったらしくて……」

僕の目が、『それ』を捉えた時、あれだけ激しかった雨音が、消えた。

『凜がね……っ凜がね……』

母の声に涙が混じる。なぜだろう。雨の音は聞こえたのに母親の声ははっきりと聞こえる。

目の前の道路に無造作に置かれた『それ』は。

凜が笑顔と共に掲げていた『それ』で。

僕はただ固まる。

『凜には……もう……っ』

会えない。そう続く頃には母は電話口の先で泣き崩れていた。

僕は、ただただ……固まっていた。

【5】ある雨が降る日への回想（後書き）

雨が降り続いたままですが。

ではまた次回。

【6】そしてとある晴れた日の今へ（前書き）

パスタは固めが好き。

でっって言うね。いや、言わないで。

はい、本編どうぞ。

【6】そしてとある晴れた日の今へ

僕は自分を責めた。

なぜあの日僕は妹の晴れ舞台を見る為に個展の準備を休まなかったのか。

あの日僕が少なくとも会場に足を運んでいれば、事故は起こりえなかった。

つまり僕のせいだ。僕が妹を、凜を死なせたのだ。

僕の中でそんな思いがぐるぐると渦の様に巻いては暗い水底へと消えていった。

両親は僕がそんな風に考えているのを知っていたからこそ、僕のせいではない。誰かが責められてもあの子は喜ばない。そんな事を口にした。

事故のそもそもの原因は衝突した車のドライバーの前方不注意。

客観的に見ても過失の所在は明らかであった。しかし両親は決して責めるということをしなかった。

あの子が喜ばない。

その思いが二人にあえて辛い道を選ばせたのだろうか。

葬式も終わり、驚くぐらい早く妹の死を悼む空気が薄れていく中、僕自身も本来の気持ちを取り戻すべく、大学生活へと戻った。

しかし、真っ白なキャンバスを前にして、筆を握り締めた僕は、自分の中のある変化に愕然とした。

絵を描く気がまるで起きない。以前は心躍らせた白いキャンバスを前にしても何も感じなかった。

なぜこんな事が起きたのか。原因は分かっていた。

絵を描いていたから妹を死なせる様な結末を招いた。そんな思いが心のどこかにあったからだ。

しかし僕は絵を描かなければならなかった。でなければ卒業すら出来なかったから。

絵筆を握り、ただ何かに追われる様に描き続けた。

卒業はした。しかし、入学時に思い描いていた様な夢のある結果は得られなかった。

そりゃそうだ。美大に通う様な連中は好きだから、何も疑わず一本の道走り続けた。

周りにはそんな奴らしきいなかったのだ。

よーいどんで職探しをして勝てるはずが無かった。

僕は見事に売れ残り、結局今の生活へと至る訳だ。

絵はもうあまり描いていない。描く気を起こさせる何かが僕の中に生まれてこないから。

過去を、引きずっているから。

そんなある日、電話が鳴った。高校時代の友人。突然どうしたと聞けば、これまた高校の時の友人が事故に遭ったと聞かされた。

僕は休みを見つけて見舞いに出かけた。

幸いにも友人は元気そうだった。怪我は痛々しそうだったが、綺麗な彼女さんが横に付いていたのでそんなに可哀想に感じなかった。………うん、感じなかった。

そしてその日、僕は聞いたのだ。あのピアノの音を。

引き寄せられるように僕はその場所で、彼女と出会った。

もしかしたら妹に近い物を感じたのかもしれない。

かもしれないが、でもそれ以上に彼女自身にとっても魅力を感じた。

だからこそ思う。

「やっぱり連絡先聞いとくべきだったかなあ」
と。

あの話の空気感からしたらそのぐらいは無理なく出来そうだったな。

……ちくしょー。

言ってみたかっただけ。

まあ、縁があればまた会う機会もあるだろうに。

「ふんふん ふうふうふうん」

なんともご機嫌な鼻歌が聞こえてきた。

しかもその主は……。

「ふんん」

先程病院で会ったなんとも賑やかな、菜那ちゃんだ。

僕は彼女が出てきた店を見る。

文房具屋。

「……………」

「えへへ、いい紙を選んでしまいました。これで思う存分レポートを書けるよ」

本気でレポート書く気だよ。柏木さん止められなかったのかな。

「ふんふふーん ……ん？」

そして菜那ちゃんの視線と僕のそれが交差する。

「あ……えーと……」

菜那ちゃんは俺の顔を見るなり考える。考えて、その末に……。

「浅井長政さん！」

ババーン！

「……え？どこから突っ込むのが正解？」

答えは僕には分かりそうになかった。

【6】そしてとある晴れた日の今へ（後書き）

ラーメンの麺の固さで、

バリ肩！

……誤変換です。にしてもすごい凝ってそうな肩だ。

では次回。

【7】東雲さん（前書き）

ブーメランについて。

昔投げたら戻ってくるのに憧れて一度は投げてみるが、

返ってきた試しがない。

っていうね。

【7】東雲さん

「えーっと……朝倉義景！」

「惜し……くはないか。戦国武将がかすめていくのはなんでだろう」「
全力で僕の名前を間違える菜那ちゃんにたははと苦笑い。」

「……ごめんなさい。でもなんとなくそんな感じの名前だったよ
うなのは覚えてるんだけど」

菜那ちゃんは申し訳なさそうに少々俯く。

うん。根本は間違ってる。後は組み合わせ次第だ。

「僕は朝倉政長。よろしくね」

僕は改めて、と言った感じで名乗る。

「あ、なるほど……。私は東雲菜那。将来は多分柏木菜那になっ
てるはずです」

そう言ってペコリ。なんかすごい事を言ってる気がするがすごいな
この子は。

「……。あの、一ついいですか？」

「ん？なんだい？」

菜那ちゃんはまさに恐る恐るといった感じでこんなことを聞いてきた。

「朝倉さんは本当に藍の彼氏候補なんですか？」

胸の内をこつんと叩かれる様な質問。そういえば目指せ恋人とかそんな様なことを言われていた気がする。

「いや、残念ながら……でいいのかな？僕は藍ちゃんとはそんな立ち入った関係じゃないよ。というか今日初めて喋ったしね」

そもそも知り合ったのが今日だし。

それを聞いて菜那ちゃんが「え！？」と声を上げる。

「しよ、初対面だったんですか？」

「うん。今日たまたま会ったんだ」

友人の見舞いの帰り。もしピアノの音を聞き逃していたらあの出会いはなかったんだろうな、そう思うと少しだけ感慨がある。

「へー……」

菜那ちゃんはなにやら意味ありげに頷く。

「どっつしたの？」

「いえ、端から見てたら普通に仲良さそうに見えたんで、もしかして本当にいい関係なのかなとか思ってたんですけど……」

それを聞いて今度は僕が「え？」となる。仲良さそうに見えた？僕と藍ちゃんが……？

「あの子ってあんまり男の人と仲良くする事がないんで余計ですね」

「そうなんだ」

人懐っこく喋ってくれた様子が簡単に思い出せる分意外に感じる。

「というより男の友達っているのかな……。高校時代もそんな風は無かったし」

菜那ちゃんはどうーんと考え込んでしまう。

「二人は同級生なの？」

「え？あー、はい。一緒の高校に行ってたんです。……。あの子は体が弱かったんで、あんまり来れてなかったですけど」

「でも二人は大分仲が良いように見えたけど？」

そう言うと菜那ちゃんにはあつと笑い、

「そりゃそうですよ！あんな可愛い子ほっとく訳ないじゃないですか！いの一に親友の名乗りを上げましたよ！」

目を輝かせながらふんすと鼻を鳴らす。あ、なんかその光景目に浮かぶな。

「まああの子ピアノっていう超強力な武器で音大に行って、なので大学は別々ですけど」

茉那ちゃんが心底悔しそうに見えるのは実際心底悔しいからなんだろうな。

「音大かあ、ていうことはやっぱりピアノ上手いなだね」

今日聴いた演奏。心に響く物があつたのはもちろんだが、それ以前にかなり上手かったとも素人ながらに感じていた。

「もちろんですよ！全国でも指折りの実力を持ってますからね」

と、なぜか茉那ちゃんがどや顔。

「へえ、そいつはすごい」

「でも絶対にそういう事をひけらかしたり自慢したりはしないんですよ。賞を取った時に喜んだりはしますけど」

それがまたあの子の魅力なんです！と茉那ちゃんは力説。

「本当に私が男だったら放つとかないですよ本当」

本当に挟むあたり割とマジにそう思ってるのかもしれない。

「……と、言ってみて私はちらりと朝倉さんの様子を窺ってみたり」

横目で覗き見るような目で茉那ちゃんがちらちら見てくる。

「えと……。何が？」

「いやいやいやいや。私がここまであの子の魅力を語ったんですから！ ずばり、感想を……。感想？」

菜那ちゃん。自分でも処理しきれず首を傾げるのやめようよ。

「まあ、感想というか……。藍ちゃんが良い子だっていうのは十分分かったし伝わったよ」

それは事実。無難ながら事実だからしょうがない。

「むう。なんか無難ですね」

指摘されてしまった。

「まあいいです。っと、もうこんな時間なんですね」

菜那ちゃんは時計を確認すると、たたたと小走りになり、

「これからもあの子と仲良くしてあげてくださいね！」

とだけ言って去っていった。

「……………」

残された僕一人。

とりあえず、だ。

またあの病院に行く事になりそうな予感、がしていた。

【7】東雲さん（後書き）

紙飛行機について。

よく飛んだ時に限って隣の家とか行っちゃいけない所に飛んでいく。

なんのこっちゃ。

では次回。

【8】再会。そして？（前書き）

なんかクリスマスのイルミネーションがそこかしこで始まっています。

……。

それだけです。

はい。

【8】再会。そして？

そして病院に来た。

とりあえず浩輔のお見舞いをそこそこに済まし……。

「おい、簡略化すんなそこ」

ごめん浩輔。今回の主目的は違うんだ。

「そうなのかよ。じゃあ、何しに来たんだよ？」

ちよ、ちよつと用があつてね。

「その用を聞いてるんだけど……。まあいいや、お前がくだらない嘘つくとも考えられないし。また来いよ。しばらくはここが俺の拠点だ」

浩輔はそう言つて自分の悲観的とも言える状況を笑い飛ばす。

強くなったよなあ、浩輔。やっぱりあれかな。あの彼女さんの為に頑張ったのかな？

とかなんとか考えながら僕は病院内を目的の場所へ。

「……………」

辿り着いた多目的ホール。しかし今日はピアノの音は聞こえては来なかった。

「むしろ前回のあれがラッキーだったと考えるべきかもね」

無人のピアノに近づき、何となく椅子に座ってみる。

「……」

僕は音楽には全く造詣が無いから、この黒と白のそれがあの素晴らしいハーモニーのなになのか全く分からなかった。

「……えい」

人差し指を伸ばして白鍵の一つを押してみる。あ、白鍵って名前はさすがに知ってたよ。

静かな室内にピアノの音が静かに響く。

本当に静かだなあ。というか僕は何をやっているんだろう。

我に返った僕はやれやれと椅子から立ち上がろうとする。

「あれ？これから一曲披露してくれるんじゃないんですか？」

「え？」

聞き覚えのある声。その主は、先日と同じ朗らかな笑顔を浮かべてピアノの前に立っていた。

「藍ちゃん……つてあれ？」

しかしその装いは以前とは全く違っていた。

それは私服だからどうこうという問題ではなく、というか私服ではなかった。

「藍ちゃん、それ……」

彼女の服装。それは、この病院の入院患者が着るその服であった。

「ええ、今私入院してるんです」

彼女はさらりと言うが、僕はいそいそですかとは流せない。

「入院つて……大丈夫なの？」

そういえば体が弱いとかつていう話も聞いた気がする。この入院もそれが関係してるんだらうか？

「ええと……貧血起こして倒れちゃいまして……」

「え？貧血？」

どんな病気かと思ったが藍ちゃんが口にしたのは実に聞きなれた単語であった。

「外を歩いていたらめまいがして倒れちゃいまして……。ただの貧血で間違いはないらしいんですけど私人より体が弱いので念の為に」

「なるほどね。じゃあ体自体は大丈夫なんだね？」

彼女ははいと頷く。その様子に僕はほっと胸を撫で下ろす。

「……もしかなくても私の事心配してくれちゃいました？」

藍ちゃんは可愛らしく小首を傾げての笑顔。

……癒しですね。

「もしかなくてもね。一瞬どきっとしちゃったよ」

僕は大きさに額の汗を拭うような動作をする。

「ごめんなさい。まさかこんなにも早くまた会えるとは思わなかったの……というよりも朝倉さんは何でここでしかもピアノ弾いてたんですか？」

「え、ええと……」

藍ちゃんからの至極まっとうな質問に僕は一瞬言葉を詰まらせる。

まさか君に会えると思ってなんて言葉は僕の口からは出なかった。くっ……。

「いや、なんとなく」にきたら藍ちゃんに会えるかな……なんて

出たよ！僕ってなんなのさ！

「え……」

藍ちゃんはなんか面食らってしまったている。そりゃそうだろう。まだ2回しか会ってない男からこんな齒の浮く様な台詞を言われたらそりゃこうなる。

「も、もう！朝倉さんがそんな事言ったら私、お、驚いちゃうじゃないですか……！」

ん？ん？なんだろう。藍ちゃんが若干頬を赤らめて……。

……言って良かったかもしれないな。

「あ、あはは……ごめんね」

と言いつつ僕も所在無さげに頬をポリポリ。

「……」

「……」

そして妙な沈黙。しかしそれを気まずいと感じる間もなく藍ちゃんがこの沈黙を破る。

「そ、そういえば朝倉さん！」

「な、なに？」

やけに大きな藍ちゃんの声に僕もびくつとしながら反応してしまう。

「今度菜那と柏木さんと遊びに行く話があるんですけど……。一緒に、行きませんか？」

唐突な誘いだった。

「ぜひ」

しかし僕は迷わなかった。

理由はと聞かれれば、その場の勢い。これに尽きる。

【8】再会。そして？（後書き）

クリスマスかあ……（遠い目）

では次回。

【9】藍と菜那（前書き）

眠い。

はい、9話どうぞえ。

【9】藍と菜那

これは、政長が病院を訪れるよりほんの少し前の時間。

藍が入院している病室に、菜那が訪れていた。

「あーい！あいあい！」

ひよこりと菜那が顔を出す。

「人の事を猿みたいに言わないでよ」

「いやー。そのくらい可愛いって事だよ。いいことじゃん」

菜那は相変わらずの輝くような笑顔で病室に入ってくる。

「その様子じゃあ入院って言っても大した事なさそうだね」

「うん。検査入院みたいなものだし。明日明後日には退院できるしね」

藍のその言葉に、菜那はぴこんと小さなツインテールを触手のように反応させてずいといと藍に迫る。

「おおー！それは都合がよろしいね」

「な、何が……」

迫られた分ずいと後方に引いた藍。

「実はね。今度シュー君と遊びに行こうという計画があってね」

「うん」

「藍も来ない？」

「……え？二人で行ってあげばいいじゃない。私むしろ邪魔になっちゃうよ」

藍は無理無理と両手を振る。

しかし菜那はそんな様子にも動じない。

「藍は空気が読めるからね。そういう風に言う事は予想の範疇だよ」

ずびしい、と菜那は藍の鼻先に人差し指を突きつける。

「うう……むずがゆいよう」

「知ってる。なんかこう言い表せない感覚だよ。じゃなくて！」

菜那は続ける。

「藍が来たら私達のランデブーの邪魔になっちゃう？じゃあ来ないほうがいいの？いいえ、それはナンセンスよ！」

「よくすらすらそういつ台詞出てくるね」

「答えは二つに一つ！藍が辞退するか。それとも藍も相方を連れてくるか！」

「え？」

「我々は後者を希望します！全会一致で」

菜那は勢い良く手を上げる。元気がいい。

「……ふえ？私が？あ、相方って……」

「もちのろんで彼氏。もしくはそれに準ずるポジションの男子」

「か、彼氏なんていないよ！そ、そういう人はいないって菜那も知ってるでしょう？」

藍が必死にそう言っていると、菜那は妖しく口角を吊り上げての笑顔。

「知ってるよ。藍はとっても純情ちゃんだから憧れの先輩に声掛けられたらそれだけで蛇に睨まれた蛙の石像状態だもんね」

「そ、そういう風に言わないでよ！……ていうか蛙の石像じゃ蛇に睨まれる前から変わらないじゃん」

「そこに気付くとはなかなか冷静だね。いやあ、別に悪い事だとは思わないよ。むしろいいじゃん、このあらゆるモラルと倫理が乱れたこの昨今、ピュアな藍が眩しくてつらい」

辛っ！とばかりに菜那は自分で自分を抱きしめる。

「もはやこの子が何を言ってるのかまるで理解できない」

藍は自分と茉那の間にある？の壁の厚さを痛感した。

「……というのは置いて。藍にいい人がいないのは承知の上でね。ある人を推薦しようと思つて」

「誰？」

「朝倉さん」

茉那は間髪入れずに答える。そして藍はその速さと回答の内容に表情が止まる。

「朝倉、さん？」

「そ、あの初対面で藍と仲良さげに喋っていた朝倉さん」

「な、なんでここで朝倉さんの名前が出てくるの？」

藍は戸惑いを押し隠しつつ訊ねる。

「んふふー。朝倉さんがあんなを気に入っているみたいだから」

「えー！」

「だと尚面白い」

「え？」

藍の表情に困惑と疑惑が混じる。

「でも悪く思っていないのは事実だし。これも何かの運命かもよ？」

「でも……か、仮に誘うとしても連絡先を知らないし」

「またここ来るからその時間けばいいじゃん」

菜那は藍の発言を些細な問題程度に返していく。

「なんでそんなこと分かるの？」

「勘」

「勘!？」

「でもそう言いつつまた会えたら運命信じちゃうっ？よし信じちゃう
う」

「……はあ。なんで菜那はこういうところでアグレッシブなんだろ
う」

藍はため息を一つ。

「まあまあ、ちょっとした遊びだと思ってさ。もし朝倉さんここ
で会うようなことがあれば、誘う」

「もし来なかったら？」

「来なかったら……」

考える菜那。

「じゃあケーキでもおごってもらおうかな」

と藍が提案する。

「おうふ。……こりゃ是が非でも来てもらう必要が出来た訳なのよ」

「あはは。まあ、もし来たら、その時は声を掛けてみましょう。来たらね」

この時の藍の気持ちは、そんな都合のいいことあるわけないが半分、でも来たらそれはそれで、が半分。要するに複雑な状態だった。

だから、いざ朝倉政長その人を目の前にした時には、その複雑な何かが、彼女の中で渦巻いていた事を、朝倉自身は知る由もないのであった。

【9】藍と菜那（後書き）

ぐ！。

では次回。

【10】書名を選んで（前書き）

.....。

トッポ食いたい。

トッポ食いたい。

【10】暑さを避けて

夏は暑い。それは当たり前前の事。

人間は暑いのが基本的に苦手。これも特に疑問の余地は無い。

つまり人間は夏の暑さは苦手なのである。

故になんとかしてその暑さから逃れようと様々な手段を講じる。

海に行くのだの、プールに行くのだの e t c ……。

今回はそういった避暑のお話。

上記のようにあまり色気がある感じではないですが。

というわけで僕こと朝倉政長は電車に揺られております。

藍ちゃんからの突然の誘いから約一週間。いよいよそのお出かけの日が来たのである。

向かっているのはとある自然公園。緑に囲まれたいわゆる避暑の為のスポットである。

なるほど今はそのピークとは言わないまでも結構暑いからこの行き先自体は疑問には思わなかった。

唯一疑問に思うとすれば、目の前で繰り広げられている光景……

「ポツキーゲーム駄目なの？」

ポツキーくわえて臨戦態勢な菜那ちゃんが残念そう。

「いい理由がないな」

ばつさりいくのは隣に座る柏木さん。

「プリッツは？」

「ならいぞ、と許可が出せる程俺は意味不明ではないな」

「バームロールは？」

「なんか互いにもさもさするだろ絶対」

「バタピーは？」

「くわえた瞬間ほぼゲーム終了じゃねーか」

「トツポは？」

「最後までチョコたつぷりだから駄目だ」

次々にお菓子を繰り出す菜那ちゃん。それを見事にぶったぎっていき柏木さん。

いわゆるボックス席の正面で繰り広げられるその光景に僕は生暖かい笑みを贈っていた。

なんかとりあえず仲良さそうだからいいと思います。

「朝倉さん、食べます?」

僕の隣に座る藍ちゃんが鞆からコアラが沢山なあのおお菓子を出してくる。

「あ!じゃああれはどうなのシュー君!」

めざとく食いつく菜那ちゃん。

「眉毛がいれば話は別だが……」

もうよく意味が分からなかった。

そんなこんなで目的地に到着。

都会の喧騒から離れたその広い広い敷地には、

広い高原があったり、

川が流れていたり、

「モー」

牛が闊歩したりしていた。

「さあ、行くわよ!」

菜那ちゃんが鼻息荒くやる気満々の様子。

「あんまり気合入れて動き回ると迷子になって飼育員さんに保護されて荷馬車でのごとと市場に連れてかれるから気をつけるよ」

柏木さんがやれやれといった感じに菜那ちゃんの頭を手でぽんぽんと叩く。

「……なんで悲しい歌の主人公にされてるんだろっ、あたし」

テンションが急降下か、と思いきやそう簡単には落ち込まないよう
で、

「しかしシュー君と一緒に乗馬でランデブーするにはそのくらいの
リスクなんのその! さあ、行くよシュー君!」

ぐいぐいと柏木さんの腕を引っ張る菜那ちゃん。

「と、言うわけで我々はランデブーしてくるからそっちはそっちで
楽しんでちょうだい!」

とにこやかに手を振りながら菜那ちゃん達は去っていく。

「……」

後に残されるは僕と藍ちゃん。

といつかずっとあの二人が喋ってるから別の作品かと思ったよ。

「……僕達は僕達で行ってみよっか」

「そう、ですね」

僕達はゆっくりと歩き始めた。

もっしやもっしや

もっしやもっしや

「まさかカピバラがいるとは思わなかった」

「可愛いですねー」

僕達の目の前では大きいカピバラと小さいカピバラが並んでもっしやもっしやしていた。

大変癒される光景です。

「それにしても今日のこの集まりさ」

「はい？」

俺は一週間ふと思い続けた疑問を口にする。

「なんで僕呼ばれたの？」

柏木さんと菜那ちゃんはあんなんでもカップル……のようなものな
んだろうから疑問の余地は無いとして、藍ちゃんも菜那ちゃんとは
特に仲が良いようだからそういつた意味で納得は出来るが、

僕の席が用意された経緯が見えない。

「え、えーつと……。い、嫌でしたか？」

「え？いやいや、そんなことはないけどふと疑問に思ってさ。僕な
んか皆とは知り合ったばかりだしね」

なのにこうして今一緒に遊びに来ている。これも縁というやつなん
だろうか。

「ら、菜那が誘ってみれば、なんて言ってたんですよ。藍が一人に
なっちゃうんじゃないかって……とか何とか言って」

「それで僕か。なかなか光栄な話だね」

でもそれって端から聞いたら……。

「……………」

僕がその考えに辿り着く頃、目の前では一頭増えて大中小のカピバラが

もっじゃもっじゃ

していた。

【10】暑さを避けて（後書き）

ホワイトロリータってお菓子ありますな。

……え？

いや、それだけです。

では次回。

【1-1】くっちゅーくっちゅーくっちゅー(前書き)

おかぴ

かきぴー

……

かきぴー食いたい。

じゃあ、いっしょ。

【11】くっちゃんくっちゃん

自然は心を癒してくれる。

というわけで僕は現在進行形で癒されている。

「ほわあ〜可愛い〜」

そして僕の隣で膝にうさぎを乗せた藍ちゃんもぼわぼわと癒されていた。

なんとなく動物と触れ合えますよ的なコーナーにやってきたのだが、彼女の前にはうさぎ。そして僕の前には……。

「なぜ？」

白いアルパカがいた。

なんか口元くちやくちやくさせながらじっとこっちを見てくる。なかなか挑発的な態度だ。

「朝倉さんも触れ合ってみたらどうですか？」

「いや、なんか近づいたらこいつが今口に溜めているつば吐かれそうで怖くてね」

一進一退の攻防である。

「あーなんかそんな動物いましたよね。気に入らない相手にはつば

を吐きかける動物」

藍ちゃんはうさぎを乗せたままアルパカを見る。

「……動いた方が負けだよ」

「あはは、なんですかそれ」

この平和極まりない攻防は置いといて、僕達はのんびりとした時間を過ごしていた。

今の生活は決して何かに追われる様な余裕の無い生活ではない。

しかし、これだけ自然に溢れた場所に来ると、そんな普段の生活すらせつかなものに見える。

「もう少し行けば海が見えてくるんですよ」

藍ちゃんがぼつりと呟く。

「私、海ってあまり行った事ないんですよ。昔から体が弱くて遠くに出かける機会が少なかったから」

「今の海って言ったら海水浴の人達でさぞかしごったがえしてることだろうね」

まるで人がゴ……これ以上はやめておこう。なんとなく。

「海水浴もいいんですけど、私もっと見たいものがあるんです」

「見たい物？」

僕の言葉に藍ちゃんは嬉々として頷く。

「朝日が昇る瞬間です」

「朝日……」

「太陽が昇る瞬間、海全体が黄金色に輝くんです。世界中のどんなに美しい物も太刀打ちできない一瞬の宝物なんです」

藍ちゃんが恍惚とした表情で語る。

「へえ……藍ちゃんは見た事あるんだ？」

しかし僕の問いに藍ちゃんは首を横に振る。

「いえ。話を聞いたり写真で見せていただく事はあるんですけど……
…実物は見た事無いんです」

「そうなんだ」

「だから一度でいいから見てみたいんです。その黄金色の海を……」
活き活きとした表情で語る藍ちゃんに僕はつい見とれてしまった。

「な、なんですか……？」

そしてその視線に気付いた藍ちゃんが若干恥ずかしそうにこちらをちらちら。

「い、いや……。ぼ、僕で良かったら一緒に行かないかい？なーんて……」

照れ隠しによく分からない誘いを口にしてしまった。

「え………本当ですか」

だが案外はずれの台詞ではなかったらしい。僕の見方が間違っただければ藍ちゃんが少し喜んでるように見える。

「僕なんかでよかったらね。それにこういうのは誰かと共有した方がより嬉しかったりするし」

今日は恥ずかしい台詞が次々に飛び出してくる。なぜだ？大自然の開放感からか？それとも……

くっちやくっちや。

目の前のアルパカの魔力だろうか。……魔力って何？

ともあれ藍ちゃんとかかなり楽しそうな約束を交わす。

それにしてもこうして二人並んで動物を眺めたり触ったりしてるだけなのになぜだか心が満たされていく気がしてならない。

これもアルパカのまりよ………じゃないな。それは絶対違う。

隣に座る彼女の影響が大きいんだろうな。確実に。一緒にいて楽しいし。

俺自身長い間眠らせていた感情が揺り動かされている気がしてならない。

……藍ちゃんは俺の事どう思ってるのかな？

そもそも今回だって藍ちゃんから誘われた……んだし。

気になる。しかし聞けない。易々と聞いてはいけない気がする。

「朝倉さん？」

いつからかは分からない。しかしいつの間やらきよんとした顔で藍ちゃんがこちらを見ていた。

「いやあ、このアルパカいつまで俺の前にいるのかなって」

くっちやくっちやく

そんなこと知らんと言わんばかりにアルパカはつばを溜め続ける。

「朝倉さんの事気に入っちゃったんじゃないですか」

「いやあ、だったらもっとポジションあると思っちなあ……」

くっちやくっちやく

アルパカはただただつばを溜めていた。

【11】くっちゅくっちゅ (後書き)

何だこのオチ。

では次回。

【12】考える章（前書き）

今年もあとわずか（笑）

この話は年を跨ぎますので。

とごいじやひま。りはじいひん。

【12】考える章

楽しい時間というものはあるという間に過ぎていく。

着いた時には高々と昇っていた太陽が今は既に地平線の彼方に消え去ろうとしている。

ガタンゴトン。電車に揺られ僕達一行は帰路に就く。

気持ち良く疲れるとはこの事かもしれない。まさに充実した疲れがじわりと僕の体に居座っていた。

電車の椅子の温かさと特有の揺れがいい感じに眠りを誘う。

だが寝る訳にはいかない。なぜなら、

「んにゅっ……」

隣で可愛らしく寝息を立てている藍ちゃんがいるからだ。

柏木さんと菜那ちゃんは少し前の駅で乗り換えの為既に別れていた。以下別れ際の二人からの言葉。

菜那「朝倉さん！送り狼にならないようにね！」

柏木「狼にならなくとも猫科の肉食動物とかにもなっではいけないからな」

菜那「えっと……そんなことになればまさしくピンクパンサーだよ

「！」

柏木「そうだな。事を起こした瞬間背景がピンクパンサーだな」

菜那「一昔前のコントみたいになっちゃっよ」

柏木「……………どう考えても趣味がいいとは思えないな。だからやはり送り狼にはなるな」

ここで電車のドア閉まりますぷしゅー。

もう意味が分からない。

もう意味が分からない。二度言ってみました。

今後長い時間をかけてあの二人を理解していこうと考えた瞬間でもあった。それにしても意味が分からなかった。……………いや、送り狼の意味は知ってますよ。って僕は誰に言い訳してるんだか。というか言い訳にすらなっていないな。

僕はチラリと車内の路線図を見る。

藍ちゃんが降りる駅は僕が降りる最寄り駅の先。つまり単純に見たら僕の方が先に降りる、のだが。

電車は今、僕が降りる駅に停まっている。まもなくドアは閉まる。

しかし僕は降りない。理由はまあお察しの通りです。

僕の隣で眠るお姫様を守る騎士……………は格好つけすぎか。一兵卒とし

て命を賭して守り抜く所存であります。……固いな。というかまあどうでもいいか。

僕自身藍ちゃんの降りる駅、その周辺はあまり行つた事はなかった。たった数駅。しかし人間は目的がなければどんなにわずかな距離でも一生行かない事なんてのはごく普通の実事なのであるう。

じゃああれかな？僕と藍ちゃんがこうして今二人電車に乗っているのも実はすごい事なんじゃないかとか思えてくる。偶然の上に成り立った偶然、みたいな感じ。

そこはベッドタウンであつた。だから高架を走る電車からは真つ直ぐに夕日が見えた。眩しかった。しかしそんな眩しさの中に、家々の生活の気配。具体的に言えば灯りの点き始めた窓や涼しくなったのを見計らつての犬の散歩。そんな他愛のない光景が足早に過ぎ去る車窓、その四角いキャンバスから見えた。

何一つ派手な事はない、しかしそれが実は幸せなことである。どこかの学者の言葉みたいだが、しかしその通りだと僕は思う。

幸せな人はむしろ自分の幸せについて考えを巡らせない。絶対ではないだろうがしかしあえて考える人は少数であるう。

僕は、今日に至るまで、幸せとは、生きる事とはなんなのかという答えを自問し続けていた。

分かっている。はつきりとした答えが出ない事は。仮に出たとしてもそれが絶対のものにはならないだろう。僕が肉体的に、精神的に変わり続ける限り答えは日々刻々と変わり続けるだろう。

空いた電車内。夕日に目を細めつつ窓外の景色を見る。

ただそれだけの特別な事はなにも無い。初めての経験でもなんでもないのに、僕はその行為を止めることは出来なかった。

僕が目を離したら、その瞬間に形を変えて、今ではない何かになってしまいそうな気がしたから。

そんな事を考えている内に電車は藍ちゃんの最寄り駅へと到着した。

さて思考の時間は終了だ。代わりにお姫様の護衛の一兵卒にジョブチェンジしなくてはね。

僕は藍ちゃんの肩をそつと揺らして起こすのであった。

ていうかジョブチェンジで。

【12】考える葦（後書き）

でも実際夏の西日の眩しさは半端ではないですがね。

では次回。

【13】真つ白な（前書き）

イタ電はいやですね。

やめてほしいです。

……。

イタリアからの電話じゃないですよ？

時差。では本編どうぞ。

【13】真つ白な

月日とは流れ行く川の様で。

僕が藍ちゃんと出会ってからあれよあれよという間に時間は過ぎ去っていった。

その間、色々な事があった。

二人で美術館を訪れたり。

二人でオーケストラの演奏会に行ったり。

どれをとっても楽しい記憶ばかりであった。

そうして二人時間を重ねていく中、僕の中である変化が生じていた。

もう一度、絵が描きたい。そう思い始めていた。

今だって絵を描いていない訳ではないが、しかしこれほどに強い思いに駆られたのは久しぶりであった。

「よいしょつと……」

ある夜。僕は自宅で一人筆を走らせていた。

その真つ白な世界に描かれていくのは、今まさに太陽が昇らんとする水平線と、それを見詰める少女、の絵。

少女とはもちろん藍ちゃんがモデルである。

僕は先日柏木夫妻（笑）と遊びに行った際に撮られた数枚の写真を参考に彼女の顔を描く。

「……」

何となく気恥ずかしい。今まで実在の、しかも身近な人間をモデルに描く事は何度もあったが、そのいずれよりも今回は何とも言えない気持ちになっていた。

正直、これがどういう気持ちなのか僕自身にも説明がつかない。

描き上げれば何か分かるかもと筆を走らせるスピードを上げようとするが、彼女の部分で自動的にブレーキがかかってしまう為やはりスピードは変わらず。

このままでは海の絵になってしまう。しかも水平線というかなり単純な絵に。

そうではないはずだ。確かにこの夜明けの水平線も僕が描きたい景色だが、大事なのはそれだけではなく、この光景を誰が見ているかなんだと僕は知っていた。

そう考えれば彼女の部分で筆が遅くなるなんてのは理由は単純だ。

大事だからである。

おろそかにしたくはなかった。他のどの部分にも増して彼女だけはきちんと描きたいという想いがあった。

まあそれで極端に遅くなっているには世話がないんだけどね。

僕は今日も今日とて彼女を描きながら苦笑い。

しかし今日は筆が進んだ。修正したいと言う気も起きない。これはいいぞと直感が告げる。

完成したところで何かがある訳ではない。ただ僕自身が満足するだけ。

しかも藍ちゃんには僕がこの絵を描いている事は教えていない。なんとなく恥ずかしいから。

そんな単なる自己満足な作品だが、僕はこの絵と向き合ってる時間がとても好きだった。

難しい事は何もいらぬ。ただ筆を取り、描きたい物を描きたいように描く。ただそれだけの事が楽しかった。

思えば僕が絵を描くのを好きになったのもこういった単純な思いからだった気がする。

クレヨンを握って白い紙を色で埋め尽くすのが楽しくて、

水彩の絵の具の繊細な表現が僕の好奇心を駆り立てて、

鉛筆だけで構築される白と黒だけの世界に奥の深さを痛感させられて、

……。そうだった。僕はいつでも絵を描くのを楽しいと感じていた。しかしあの一件の以後、僕は絵を心のどこかで無理矢理にでも悪者にしようとしていた。そこに逃げようとしていた。

だが彼女を見てそんな後ろ向きな思いは吹き飛んだ。彼女は自身の体の弱さをものともせず音楽を愛し、自分の進みたい道を真っ直ぐに進んでいた。

自分に正直だった。そんな彼女を見て、僕も素直になろうと思った。

素直に絵を描きたいと思う時があれば絵を描こうと。

そうして開き直って絵筆をとり、僕は描き進める。

そんな充実し始めたある日だった。

彼女、峰岸藍が再び入院したという知らせが舞い込んだのは。

【13】真っ白な（後書き）

イカタコ電線でもないですよ。

ていうかなんだそれは。

では次回。

【14】核（前書き）

たーまやー！

の季節ではない。

【14】核

その知らせは突然だった。

鳴り響く携帯の着信音。

特に何も考えずに電話に出た。

相手は柏木さんだった。

何の用かと思ったら、

「峰岸藍が倒れた」

と言ってきた。

衝撃が走った。彼女が運ばれたのがいつもの病院である事を確認し、必要最低限の物を持って家を出た。

必死に、必死に走った。彼女の無事を祈って。

だから、だろうな。

俺が着いた時、彼女は、

「あ！朝倉さん！」

と笑顔で迎えてくれた時に僕は派手に転んだ。なんかこう、コントみたいな転び方で。

「おい、大丈夫か青少年」

僕と一つとして年の変わらない柏木さんがやれやれと僕を見る。

「病院では静かにしないとだめだよ」

普段一番うるさい菜那ちゃんにも言われてしまった。

「だ、だって藍ちゃんが倒れたって……え？」

僕は確かに病床に患者服で半身を起こした状態の藍ちゃんを見て混乱する。

「これはあれだな、俺の話最後まで聞かなかったからだな」

「え？……最後、まで？」

柏木さんはうんむと頷く。

「俺は確かに峰岸藍が倒れたとは言ったが今すぐ死にそうだとかお前を焦らせる言葉は言っていないぞ」

確かに。彼は倒れたとしか、言っていない。

「更に言えばお前が電話を切らなければ入院は必要だが本人は至って無事だと伝えるつもりでいた」

「そ、そうなんだ」

それって……。僕がとても恥ずかしい奴って事だよな？

「ま、それだけ藍の事が心配だったって事だよねん。かー！言わせないで恥ずかしい。ってか！」

菜那ちゃんがうざい。とても。

「そ、そんな、私なんかの為にすいません朝倉さん……」

「いや、藍ちゃんのせいじゃないさ。ともかく大丈夫そうだよ良かったよ」

僕はととにかく彼女が無事で安心する。

「はい、今回はちょっと入院が長引きそうなんですけどこの通り私は大丈夫なんで」

「って、病院のベッドの上で言われても説得力無いよ藍」

「あ、そうだね」

藍ちゃんと茉那ちゃんのほわほわした掛け合い。なんだか見てて安心する。

「……」

だから僕は気付かなかった。この時の柏木さんが、とても厳しい表情をしていたことに。

面会時間終了ギリギリまで4人で他愛のない話に花を咲かせ、気付けば日も暮れようかという頃。

「じゃあそろそろ行くよ。また来るから」

僕達は藍ちゃんに別れを告げ、病院を後にした。

さて、帰って夕飯にでもありつこうかと考えていると、

「なあ、これから空いてるか？」

柏木さんから誘われた。

「ちょっと話したい事があるんだ」

いつのまにか茉那ちゃんはいない。つまり二人で、ということだろうか。

「いいけど……」

しかし何の話をされるのか皆目検討がつかない僕は不安を抱えたまま喫茶店に入った。

「ホットコーヒー二つ……で大丈夫だよな？」

「あ、うん。大丈夫」

僕は導かれるまま彼と向かい合って席に着きコーヒーを飲んでいた。

「で、話して？」

「うん。ま、正直言って話し辛いことなんだがな」

この人はこういう事を軽い調子で言うから分からない。本当に。

「まあ、大方の予想を裏切らず峰岸の事なんだがな」

「うん」

「ここから言う事はお前があいつを本気で心配する『男』と見込んで話す」

「……なんか重くなってきたね」

僕はますます不安に駆られる。

「まあそう構えるな。話の核はとても簡単だ」

「核？」

「そう。じゃあ、話すか……」

柏木さんは少し身を乗り出して、その『核』を告げた。

「峰岸が今回倒れたのはいつもの貧血とかそんなレベルじゃない。そんなとは比較にならない病気を発症しちまったらしい」

「……は？」

僕は一瞬柏木さんが何を言っているのか分からなかった。

「これが『核』だ」

柏木さんはそう言い切った。

【14】核（後書き）

かーぎやー！ー！

の季節でもない。

では次回。

【15】可能性（前書き）

もう今年も終わりですな。

……。

それだけ。

【15】可能性

その『核』があまりにもシンプル過ぎて、僕はどこから聞いていいのかわからなくなる。

「混乱してるか？」

「正直、大分」

それは様子にも表れていたようで、柏木さんは割とすぐにそう聞いてきた。

「ま、いきなりこんなこと言われたら無理もないか。だが紛れも無い事実であることを俺は付け加えとく」

柏木さんは冷静にコーヒーを口に運びながら付け加える。

「……病気って、どんな病気なの？」

「俺も詳しいところは専門外だからへたな事は言えないが、一般的に見て厄介な病気なのは間違いないな」

歯切れの悪い答え。もしそんな回答がまかり通ったらこの世にはそんな病気に溢れているという漠然とした答えになる。

「納得はいつてないようだな。だが、今回はその病気うんぬんよりそれを取り巻く事情の方が厄介だ。間違い無くな」

「事情？」

病気だけでさえ厄介なのに加えて周りの事情まで厄介って……。

「その病気な、今までの発症例は腐る程あってそのほぼ全てが完治しているかもしくは、どんな最悪の結果でも命に関わるような事にはなっていない、らしい」

「?……じゃあ、何が厄介なの?」

今の話は安心する要素はあっても厄介と感じる要素はまるで無い様に感じたけど……。

「要手術。これが大前提なんだが、必要になる物があるんだ」

「必要な物?」

「血だ」

「血?」

なにかと思っただけ聞いてみたら割と単純な答えだった。いわゆる輸血とかドナーとかそういう話だろうか?

「患者の血液型と完全に合致する人間が必要になるんだ」

「そのどこが厄介なの? まあ、そういう協力者が必要という意味では厄介かもしれないけど」

この時点で僕は彼がこの問題をややこしそくに語る意味が分からなかった。血液型が合う人間を探せばいい。ただそれだけの話。そん

なシンプルな話のどこに……。

「そう、協力者を探さなきゃいけないんだ」

可能性が頭をよぎる。一つだけ、彼が厄介だという理由に見事に当てはまる理由があった。

「もしかして、藍ちゃんの血液型って……」

僕が恐る恐る聞くとようやく気付いたかといった感じに柏木さんは頷く。

「珍しいんだよ。とてつもなくな……」

藍ちゃんの血液型は、国内でもかなり珍しく、万の単位で探さないと完全に一致する人間を見つけるのは困難なのだという。

「で、でもそういつのって登録されている人とかいてそこから」

「その上でだよ」

つまりは医者が見つめているその血液の人間では間に合わないというところらしい。

なぜ藍ちゃんなのか、と僕は本気で疑問に思った。他の人、例えば僕であれば事態はもっと簡単に、こんな疑問を抱く人間が出るまでも無く解決しているんだろう。

でも実際に藍ちゃんはその病に苦しみ、唯一提示された解決策も役者不足の状態。

藍ちゃんの笑顔を思えばこそ、僕はもどかしい思いに駆られた。

だから、僕は気付けば、

「血液検査に行つてきます」

と宣言していた。

「そう来ると思った。だが今日はやめとけ」

「なんで？」

「病院の診察時間がとつくに終了してるからだよ」

「……そうだね」

僕は焦っていたのだろう。本来ならすぐに気付きそうなこんな簡単な事に気付けないなんて。

それに僕がそんな珍しい血液型だったかどうかなんて分からない。少なくともそんな風な事を言われた記憶がない。

でも何もせずにはいられなかった。出来る事はなんでもしたいって思った。

だから、

「柏木さん。僕ちよつとやること出来たからこれで」

僕はお金をテーブルに置くと、足早に店を出て行く。

「……せつかちなおい」

僕は家に帰るやすぐに描きかけの絵に向かい合った。

これを描きあげよう。で、彼女に、藍ちゃんに見せよう。

それが何になるのかは分からなかったが、しかし何もしないなんて事は僕にはできず、結果として僕はこの絵に行き着いた。

逃げずに、描く。僕は筆を握る手に力を込めた。

【15】可能性（後書き）

そしてまた新しい年が始まる。

というかこの作品年またくなじりゃ。

では次回。

【16】違和感（前書き）

そーらを自由に、とーびたーいなー。

無理言っな！現実を見ろ！

……。

【16】違和感

「……………うぐう」

朝日が眩しい。

なぜ眩しいかと言えば答えは簡単。

だって太陽ですから。違う。僕がほぼ徹夜したからだ。

なんで徹夜したかと言えばずっと絵を描いていたからだ。

彼女と海の絵。

なんとしてもこれを描きあげて彼女を、藍ちゃんを元気付ける。僕はそう思い時間を忘れて描き続けた。

だが、徹夜のダメージは確実に僕の体に蓄積されており、じわじわと体を蝕んでいた。

「うう……………。少し寝よう」

僕は倒れるようにベッドに横になる。

そして目が覚めたら昼過ぎになっていた。

「また夜になっていたとかそんなオチではないんだね」

とかなんとか言いつつ僕はシャワーを浴びて着替えて軽くパンを食

べて家を出た。

今日は病院で血液検査を受けると決めていたからだ。

僕が彼女の救世主となれる一握りの一握りになれるかどうかは正直希望は薄いですが、それでも調べる前から諦める気にはならなかった。

もし僕が彼女を救えたらとか安っぽい願望かもしれないが、それでも僕はなんらかの形で彼女が救いたかった。

検査を終え、結果が出るまで時間が掛かるとの事で、僕はその時間を利用して藍ちゃんに会いに行くことにした。

彼女に会えるのは心が弾む。間違いなく楽しみにしている自分がいる。

病室にひよこりと顔を出すと、読書中であつた藍ちゃんが僕の姿を見つけて笑顔で、

「朝倉さん！」

とにつこり。これだけで来た甲斐があるというものだ。

だが、それと同時に僕は言い知れぬ違和感みたいなものを感じていた。

それがなにかは分からない。だが確実な、まるで魚の小骨を喉に引っ掛けた『ような』気がする感じ。イライラする。

「今日はどうしたんですか？」

藍ちゃんはそんな俺の様子には気付かずいつもの笑顔。

「いやあ、なんとなく藍ちゃんに会いたくなってるね」

血液検査の事は言わない。変に気を遣わせる事になりかねないから。

「あはは。私も朝倉さんに会えて嬉しいですよ」

こんな風に冗談っぽく言えるようになったのも二人の距離が縮まった証拠だろう。

「体の方は大丈夫なのかい？」

「はい。いつもよりちょっとだけ体調を悪くしちゃったただけなので。またすぐ退院できますよ」

この台詞は何処までが俺に掛けられた言葉なのか。僕は瞬間そんな事を考えていた。

「そっか。でも油断はしない方がいいよ。人間いつなにがあるか分からないからね」

「そうですね。でも、病院での生活は正直退屈ですからね。早く退院したいって気持ちになっちゃいます」

「そうは言ってもやっぱり体が一番だもの。もし退屈だって言うなら僕がいくらでも話し相手になってあげるから」

軽い気持ちで吐いた言葉だった。だが同時に僕の願望を端的に表し

た言葉にもなった。

「本当ですか？」

「ああ、こう見えてなかなか暇なんだよ」

と、苦笑い。

「あ、でもちゃんと働いてくださいよ。私の所に来ていて働いてませんなんて私が申し訳なくなっちゃいますから」

「大丈夫。こう見えてちゃんと働いてるから」

「もう、どっちなんですか」

ここで、二人笑いあう。

それはとても心が穏やかになる時間だった。

だから血液検査の結果が僕を救世主にしてくれる結果でない事が分かってからもあまり動揺しなかった。

これは半ば予想通りの結果。むしろここからどれだけ彼女の救いになれるかが頑張り所だ。

そんな僕が動揺したのは、家に帰ってからだだった。

描きかけの絵を見て、彼女の顔を見て、そこで僕がはっきりと違和感の正体に気付いた時だった。

キャンバスに描かれた彼女の顔と、今日見た彼女の顔が。

あまりにも違う。なんとなくとかそんな言葉で済ませられないレベルで。

これが彼女に迫る病だと気付いた僕は焦った。

しかし焦ったところで筆がうまく進むはずも無く。

そして僕の筆は止まってしまった。

【16】違和感（後書き）

せーかーいりよこつに、いーきたーいなー。

金かかるぜよ。

……。

では次回。

【17】未来への約束（前書き）

寒いっすね。

メリクリっすね。

もう17話ですか。

【17】 未来への約束

彼女の変化は僕を焦らせた。

柏木さんなんかは「長期戦は覚悟しろ。とにかく時間はかかる」と言っていた。

それを聞いた時は素直に頷いたが、いざこつした変化を目の当たりにしてしまうと、僕の心は揺れた。

だがそんな姿を藍ちゃんに見せて彼女を心配させるのは論外だ。だから僕は彼女の前では楽しい気持ち忘れなかった。

「ねえ、朝倉さん」

「ん？なんだい？」

ある日の事。いつものようにお見舞いに来て他愛のない話をしていると、彼女が突然神妙な顔になった。

「私、前に海が見たいって話したの、覚えてますか？」

彼女は遠い目で青空を見つめながら若干間延びた声で言う。

「ああ、覚えてるよ。日の昇る瞬間が見たいんだっけ？」

それは、柏木さんらと4人で出かけたときの思い出。

「そう、金色に染まる海をね、見たいなってね、今すごい思うんだ」

その声は、以前同じ事を話してくれた時より随分と元気を失っていた。

無理も無いか。入院生活で不自由を強いられれば人間多少なりとも気が滅入るってものだ。

「でもね、このままじゃもう二度と見られないんじゃないかなあ、なんて考えたりもするの」

ぽつり、ぽつりと彼女は心に溜まった物を整理するかのよう言葉紡いでいく。

その姿がとても切なくて、なんとか守ってあげたいという気持ちが僕の中に芽生えていく。でも僕には実際出来る事なんて、あるのだろうか。

「ねえ、藍ちゃん」

無いなら作ればいい。僕は思うより先に口に出していた。

「一緒に見に行こうよ」

「え？」

藍ちゃんの目が驚きに染まる。

「退院したら、一緒に海に行こう」

僕はなんとか自然な笑顔を作り出し、彼女に向ける。

「だから、一緒に頑張ろう」

今の彼女をどうにか出来る手伝いが僕にあまり出来ないなら、未来の彼女を支える約束をして、その時が来るまで僕は彼女のそばにしよう。僕はそう決心した。

「……私、行けるかな」

「行ける、絶対に」

彼女の不安を少しでも取り除けたらと、僕は彼女の手を自分の手で包み込む。

「……あ」

「その時まで僕は君のそばにいる」

後で考えれば随分と恥ずかしい台詞を口にしたと思う。でもこれが僕の偽らざる本心である以上言って後悔無し。

「……約束、ですよ」

彼女は、少しだけ潤んだ瞳で俺を見詰めてくる。

「うん、約束だ」

僕は小さな手を握る手に少しだけ力を込めた。

面会時間が終わり、僕は家に帰る。部屋には描きかけの絵が一枚。あれ以来彼女の顔を描く事が出来ずそのままになっていた。

彼女が真つ青な海を見詰める光景。

絶対に未来に実現させなければいけない光景。

そう、俺は約束したから。

「……………そうか」

そこで僕はある事を思いつく。

この絵の主役たる藍ちゃんが『今の藍ちゃん』である必要はないんだ。『未来の藍ちゃん』でもいいんだよ。

僕はこの閃きを失わないうちに、と慌てて筆を取り出す。

「この光景を見るであろう未来の彼女を描く……………」

その日は、今までの遅れを取り戻して余りあるほどだった。

どのくらい進んだかと言えば、あまりに進みすぎて、次の日には彼

女に見せに行っただけだった。

いざ彼女に絵を見せると、

「うわあ」

と感嘆の声を上げていたが、その内に、

「あれ？」

という疑問符の声へと変わる。

だがそんなのはとうに予測済み。なぜならこの絵は誰がどう見ても未完成だから。

背景の海。その色が塗られていないのだ。

だがこれにはちゃんとした理由がある。

「藍ちゃん」

この絵が、彼女との約束をより確かなものにする為の架け橋になる。

「この海は君と見に行った海の色を描く。だからこの海はまっさらなんだ」

「え……」

「君と一緒に海を見て、そしてこの絵はその後初めて完成するんだ」
「よ」

僕のさじ加減でどうとでもなるゴールライン。今回はそれを利用した。

「……………ありがとう、朝倉さん」

彼女の笑顔。ずっとずっと守っていききたい笑顔。

だけど、現実はそう甘くはなかった。

【17】 未来への約束（後書き）

メリケリの

イブっす。

では次回。

【18】夕暮れの公園で（前書き）

断言します。

年内はあと一話です。

はい。

【18】夕暮れの公園で

状況は思わしくなかった。

彼女は徐々に、しかし確実に病魔に冒されていった。

僕はなるべく病院に通った。彼女と笑顔で話し続けた。

しかし、彼女自身が体の変化を感じないはずはなく、日を追って彼女の笑顔は減っていった。

時には僕に余計な心配をさせまいと無理矢理笑顔を搾り出し、僕と話してくれたこともあった。

本来何かをしなければいけないのはこちらなのに、誰かを慮るべきはこちらなのに、と僕は少しだけ目を潤ませた。

だが泣くなんてのはまだまだしてはいけない行いだ。一番辛い彼女自身が泣かずに笑顔で頑張っているのだからそれを励ますべき立場である僕だって共に笑顔で頑張るべきだ。そうでなくてはいけない。そうでなくてはいけないのだけど……。

「ふう……」

ある夕暮れ時。病院の目の前にある公園のブランコに僕は腰掛けていた。

金属がキィキィと軋む音が妙に耳にこびりつく。日の長い夏場とは

いえもう暗くなるつかという時間には遊んでる子供達等はほとんどいない。今まではそんなに意識したこと無かったが、誰もいなかった夕方の公園というのは妙に物憂げな寂しさを感じる。

絵に描くには絶好のポイントかもしれないな。

そんなことを思いつつ僕は今度は空を見上げる。

夕日のオレンジに染まった入道雲が堂々と空の真ん中を漂っていた。真ん中と言っても僕から見た真ん中であってこの雲は皆が皆真ん中にある雲とは思わないだろう。

「……………」

彼女が見たいという景色だってそうだ。

彼女自身が見て何かを感じる事に意義がある。そして、その見ると言う過程は他の誰でもない彼女、藍ちゃん自身がやらねばならないのだ。

「ただそれだけなのにな……………」

突然、入道雲がぼやけだした。まるで絵の具の上に水を垂らしたかのように、ぼんやりとした風景になる。

僕はいつのまにか泣いていた。声は出なかった。ただ涙だけが目から溢れ出していた。

この涙が一体どういう意味を持つのか。僕自身それははっきりとは掴めない。

でも、これが彼女を想う涙である事は間違いなかった。
誰もいない公園で、僕は一人静かに涙を流し続けた。

「大丈夫ですか？」

驚いた。一人公園のブランコに腰掛けながら天を仰ぎつつ涙を流していたのだ。それはもう驚いた。

「あ、いや、これは……」

僕は慌てて涙を拭おうとして、それが視界に入り、ふと動きが止まる。

声を掛けてくれた女性。の手に握られたハンカチが僕の目の前に差し出されたからである。

「どうぞ」

その意味はすぐに分かったが、しかし突然の事に困惑した僕は思わず驚きの表情のままその女性の顔を見る。

「?.....どうしました?」

そこでもう一回驚いた。

そこにいたのが物凄く綺麗な女性だったから。

その人は驚く俺を気にせずに、ハンカチを俺の手に置く。

「はい、どうぞ」

「.....あ、えと、どうも」

僕はぎこちない動きでお礼を言うと、何も考えずそのハンカチで涙を拭った。

「隣、いいですか?」

その人はもう一つあるブランコを指差しつつ言う。

「あ、どうぞ」

僕はこれまたよく考えもせずにそう答えていた。

「よいしょっと.....」

その人はブランコに腰掛けると、前後に小さくその振り子を揺らす。

「……」

年齢は僕と変わらないくらいだろうか。それにしてもなんでまた僕なんかに声を、ってやっぱり泣いてたからか。そう考えるとすごい恥ずかしいな。

「人間、たまには内側に溜め込んだ古い涙を出してすっきりした方がいい」

「え？」

突然の言葉に僕は理解が追いつかない。

「私の母の教えです。母は口癖みたいにこう言っていました。で、私達が泣く度に、ようし思いっきり泣いてしまえ、とむしろ煽ってきたものです」

「それは、また……」

「でも、母の言う通り、涙を溜め込んでも人間いい事無いんですよ。私もこの年になってからそれを痛感しました」

その人はそこまで言うてから、僕の目をじっと見詰めてくる。

「え、えと……」

「あなたがさっきここで泣いているのを見た時思ったんです。あ、この人は溜め込んだ涙が溢れ出したんだなって」

その人は更に続ける。

「なんか気になっちゃって声を掛けちゃったんです。ごめんなさい」

「い、いや、あの僕は大丈夫ですから」

「本当ですか？」

「……え？」

真っ直ぐな目が僕を、僕の心を射抜く。

「本当に、大丈夫ですか？」

その問いに、僕はすぐに答えられなかった。

【18】夕暮れの公園で（後書き）

謎の女性とのやりとりは続きます。

では次回。

【19】それでいい(前書き)

今年最後の投稿でございます。

年を跨いでいつまで続くことやら。

ではさようなら。

【19】それでいい

「本当に、大丈夫ですか？」

その問いは、深く僕の心に刺さった。

僕は、大丈夫なのか？そんな訳はない。僕は彼女の事で思考がこんがらがり、涙まで流したのだ。そんな人間の事を大丈夫とは言わない。

「僕は……」

僕は答えに詰まった。自分自身がその問いに容易に首を縦に振れない理由を知っているから。

だからこそ他人に対してそれを打ち明けられる程素直な勇氣は持っていないかった。

「……」

だから不自然な空白の間を作ってしまった。

目の前の女性にそれをどう取られたのか。

そもそも公園で突然一人静かに涙を流すような男のすることだから多少多めに見られているかもしれない。良くも悪くも。

「……あなたは優しい方なんですね」

「え？」

驚いた。一体今までの何をどうすればそういう解釈が生まれるのか。僕はしばしその女性の顔を無意識に見詰めてしまう。

そして僕のその行動を説明を求めるそれと思ったのだろうか。女性はゆっくりと更に言葉を繋げる。

「涙を溜め込んでしまう人と言うのは自分の感情を素直に吐き出すより先に他人の感情を優先してしまうものだと、私は考えてます」
女性は遠く空を見ながら続ける。

「自分が流す涙の心配より他人の涙の心配をしてしまうんですね。これは出来そうでなかなか出来ないことです」

やがてその視線が僕に向けられる。

「でも、誰だって悲しい事がある。悔しい事がある。涙を流したくて仕方の無い時なんていくらでもあります。……私も、あなたも」

「……」

「そんな時人とはとにかく自分の中で渦巻く感情を吐き出したくてその感情を言葉に込め吐き出すのです。でもあなたは容易にその行動に出なかった。詳しい理由は分かりませんが恐らくはその感情はあなた一人の物ではなかったからではないですか？」

本当に僕の心を見透かされているような、そんな気持ち。

しかし不思議と嫌な気持ちは湧いてこない。むしろずばり指摘してもらって多少すっきりとした思いすらある。

「……はい。なんとというか、今ある人の事で悩んで……どうするのが僕に出来る事で何をしてあげられるのか分からなくなってます。てしまつて」

僕は最初は確かに藍ちゃんの事を考え素直に言葉にするのをためらった。しかし今なら、少しずつでも言葉にして表現を、この人に聞いてもらえる気がした。

「僕に出来る事はいくつか思い付くんですけどそれが果たしてその人にとって必要な事がどうかも分からないですし……もしかしたら僕の思いつく行動の全てが単なる自己満足の行動なんじゃないかって思ってます。この行動をすることで僕は彼女の役に立ったんだという自信が欲しい、というか」

自己満足。絵を描く事もそうだ。それ自体は今彼女が抱える問題の何の解決にもならない。

ただ、僕が『何かをしなければならぬ』という思いから始めただけの事。

「それは行動に移してから思ったのですか？」

女性からの問いに、僕は首を縦に振る。

「はい。でも結局それは……」

「その人は喜んでましたか？」

「え？」

言葉を遮られた事と、その問いの内容に僕は一瞬止まる。

「それとも怒ってましたか？」

「い、いえ！喜んでくれていた、と思います」

あれは彼女の本当の喜んでくれた顔。僕はそう思いたい。

「じゃあそれでいいんですよ」

女性は言い切った。

「え？」

「発端がなんであれその行動が結果としてその人を喜ばせたなら、そこに疑問を挟む余地はないはずです」

シンプルな言葉だった。結果良ければ全て良し。そんな感じの言葉。

「あなたは優しい上に他人を思いやれるから、常に相手の為を考え
てしまう。でも実際はもつと気を楽にしているんですよ。あなたに
出来る事を、その人も望んでいるはずです」

「僕に出来る事……？」

女性はしっかりと頷く。

「言い換えるなら、あなたがしたいと思った事が、そのままその人の為になっちゃうんですよ」

僕のしたいと思った事が、彼女の、藍ちゃんの為になる。

胸がすかんと一気に空気の通りが良くなったような感覚。初めての感覚が僕の心を支配した。

「……ありがとうございます」

僕は気付けばお礼を言っていた。それを受けた女性は満足そうに頷く。

「はい、どういたしまして」

「……では、僕は行きます」

僕はブランコから立ち上がる。今はなんでもいいから行動に移したい気持ちに満たされていた。

「はい、長々と変な話をしてすみませんでした」

「いえ、お陰でなんか吹っ切れました」

僕は頭を下げる。そしてその後走って公園を抜けていた。目指すは病院へ。

「……ふう〜。疲れた」

女性はブランコをひとこぎしながら大きく息を吐く。

「でも、あれであの人がその大事な人とうまくやってくれたら、嬉しいな」

女性はふふ、と笑みをこぼす。

「にゃー」

すると、どこから現れたのか猫が一匹ぴょんと慣れた様子で女性の頭に乗る。

「わっ。二代目え。いきなり乗ったらびっくりするでしょう」

女性は早くもリラックスモードに突入した猫を優しく叱る。

「いきなり『ほっとけないから』って見知らぬ人間に声を掛ける美鈴も大概だけだな」

猫を追うように今度は一人の男性が現れる。

「あ、一馬」

「まあ、お前らしいっちゃあ、らしいのかね」

「というよりも、私はあの人があんなにほっとけなかつたんだ。あんな優しい涙を流す人ほっといちゃだめだよ」

「……………それには同意だな」

二人は静かに病院の方を見る。一人の青年の幸福を願って。

【19】それでいい(後書き)

また来年ですね。

では次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8077x/>

そしてそれは青春で3

2011年12月31日03時45分発行